

多面的・多角的な思考力を育てる社会科授業 ～つながり、かさなり、ひろがる授業をめざして～

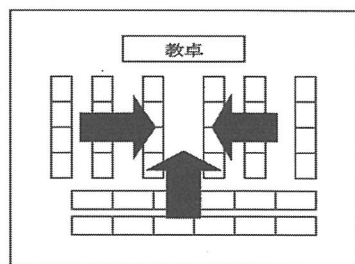
社会科 飯島知明 南岡俊之 吉田昂平

1. 主題設定の理由

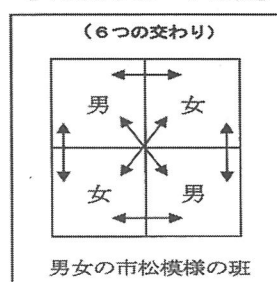
平成20年「中学校学習指導要領」改訂において、中学校社会科の基本的な方針は「基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得」「言語活動の充実」「社会参画、伝統や文化、宗教に関する学習の充実」と挙げられている。また、本校では小中高協同研究主題として『つながり、かさなり、ひろがる授業～12年間の「知」の構築をめざして～』を掲げ、本年度より研究実践に取り組んでいる。グローバル化が進む現代において、単なる知識や技能だけではなく、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、課題解決力、他者と関係を築く力、豊かな人間性などが総合的に育成され、多面的・多角的な見方・考え方により新たな価値観を形成していくことは大切である。そこで、社会科においては、「多面的・多角的な見方・考え方の獲得を通じた、ある事象への価値判断・意志決定を行うことのできる能力」を「知」と定義し研究を進めている。

社会科の「知」の獲得に向けて、これまで培ってきたコミュニケーション力を基盤としたさらなる思考力・判断力・表現力の育成を重視した。ここで言う思考力・判断力・表現力とは、自ら課題を見出し、その事象について多面的・多角的に考察し、諸資料や仲間との対話や議論を通して自らの思考や判断を再構築してまとめ、それを効果的に発信していく力のことである。こうした力の育成と、それらを支える基礎的・基本的な知識や技能の習得のために本校社会科は大阪府公立中学校社会科教育研究会（以下、府中社）とも連携し、「コの字」「4人グループ」を基本とした「協同的な学び」の手法を取り入れた学習に取り組んできた。コの字では、生徒が互いに表情を見ながら発言をするので対話活動が促進される（図Ⅰ参照）。4人グループは男女混合の市松模様配置することで、同性同士の情報交換から異性との対話へと広がり、それぞれが交わりながら主体的に課題に取り組むことができる（図Ⅱ参照）。

図Ⅰ 【コの字型の教室（発言の向き）】



図Ⅱ 【4人のグループ配置】



（←府中社研究発表基調提案より）

いわゆる従来型の「知識注入型」や「一斉授業型」から「協同的な学び」の手法を取り入れた授業を実践することで、生徒の意欲的で主体的な学びの姿勢が多く確認することができただけでなく、事象に対する考察も一面的・一方的な見方・考え方から、諸資料に根拠を見出した客観的な思考や多面的・多角的な見方・考え方ができるようになってきた。自ら学び、共に成長する過程が生徒の中で実感でき、さらなる興味・関心へとつながっていく「協同的な学び」は個人思考と集団思考の相互通行を活発化させ、多面的・多角的な思考力を育てていくのに効果的であることは注目に値する。

2. 実践の概要

【実践事例1】

(1) 題材 「明治維新」 ～ 協同的な学びの手法^{※1}を用いて ～

府中社では平成25年11月に全国中学校社会科研究大会大阪大会（以下、全中社大阪大会）を実施し、大阪府下、大阪市、堺市、大阪教育大学（附属池田中・平野中・天王寺中）が「ワン大阪」で、地理的分野・歴史的分野・公民的分野でそれぞれ2本ずつ、計6本の授業を公開した。そのうちの歴史的分野における1本は「明治維新」を題材とした授業を附属池田中学校が担当することとなったことから、本稿では「明治維新」を扱う授業の実際に即しながら、ここまでの研究過程を明らかにし、皆様方からのご意見やご批判を頂戴したいと考える。

さて、私たち昭和40年代に生まれた者は今40歳代ということになるので、その父母は戦前・戦中、もしくは団塊の世代、祖父母は明治時代後半から大正時代の生まれということになるだろうか。故人となった明治生まれの祖父が、「今思うと、祖父（つまり私からみて高祖父母）は江戸時代生まれの人やったな。」と話していた幼少時の記憶がある。当時は格別何も感じなかったが、まさに「今思うと」ある種の驚きとともに、歴史教育に携わる者として江戸時代や明治時代が案外「近い過去」なのかもしれないと感じることができる。とは言うものの、現職の教員や現役の中学生にとって明治時代はやはり教科書の中の世界であるという認識に支配されているのも事実であろう。しかし、封建社会を廃し中央集権国家体制を確立したことなど、現代社会体制の原型は間違いなく明治時代に確立し、私たちの日常生活にもその影響が色濃く残る。明治時代をどのように扱うのかは教育現場において、これまであまり大きな議論をよんでこなかったように思う。実際、多くの現場で「近現代」とりわけ「戦後史」は「時間切れ」となり、「教科書を眺めて通過する」といった扱いが多くみられた。3学期の残り授業数と教科書の残りページ数を見比べた時に、「明治維新」以降の学習は必然的に授業速度が増し、丁寧な授業が展開されてきたとは言えないのが事実であろう。

そこで本稿では、平成20年に告示された中学校学習指導要領の社会科歴史的分野において、従前は「近現代」と一括りにされていた「近代」と「現代」の学習を、授業時間数の確保も含めて一層重視するという改訂点に留意しながら、「我が国の歴史の大きな流れ」の把握を目指した授業構成を授業実践における具体例から考察していきたいと考える。

なお、平成26年の今日では、100歳以上の方々が「明治生まれ」となる。「降る雪や明治は遠くなりけり」。

(2) 目標

- ・幕末から明治初期における我が国の対東アジア政策を理解する。（知識・理解）
- ・土族の不平とは何だったのか考え、西南戦争の意義を発表する。（思考・判断・表現）

(3) 授業の実際

授業では中単元「明治維新」をおよそ6～8時間で設定し、前半の3時間程度を使って知識・理解を中心とした授業を展開した。ただその際、いわゆる一方的な知識注入型の一斉授業に陥ることなく、「協同的な学び」の手法を取り入れながら、発問による共有課題と発展課題を設定することで、

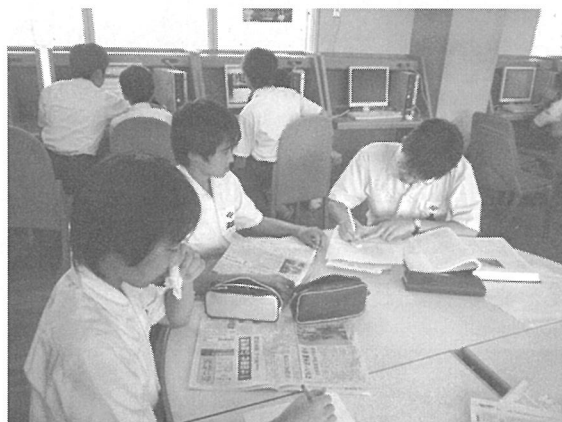
仲間との対話や議論を通して思考の再構築を促すように努めた。

後半の 4～5 時間程度（宿題を活用してもよいだろう）は、各グループごとに自由設定した明治維新に関する課題の探究学習を行い、単元最終授業時間にその成果を発表・交流したり、レジメや模造紙にまとめるといった活動により「〇〇（設定課題）を通して『明治維新』が△△であったことを理解する」といった学習を展開した。

☞ 生徒が作成した模造紙発表の一例。



☞ 自ら設定した課題の探究に挑む様子。



その結果、「西郷と大久保」を課題設定したあるグループでは、以下のようなまとめが発表された。

西郷と大久保は、本当のところは離反したのではなかったのではないだろうか。周囲の目からは二人は対立したように見えたが、西郷と大久保の絆や友情は実はずっと続いていたのではないだろうか。大勢の不平士族を巻き込んで戦争を起こすことで一つの古い時代を終焉させ、新たな国家の建設に向かおうとしたのも、二人が裏で話し合っただけで決めたことではないだろうかと思える。

また「明治維新とは」という課題を設定したグループでは、△△にあたる部分として、以下のよう結論を述べた。

「廃藩置県」も「西南戦争」もともに、欧米列強諸国の日本進出が迫る中、独立を保つために国内の力を一つに結集し、武士（大名）自らが武士の存在を否定するといった、他国には例を見ることができない革命であったのではないだろうか。しかしながら、生き方を変えることができないサムライたちは「征韓論」や「西南戦争」へと向かい、まさにその存在（命）を消していくことで、ある意味、役割を全うしていったと考える。

このように、単元計画を立案し、自ら設定した課題を探究したり発表する時間を確保することで、歴史的事実・事象の表面的理解にとどまらず、その事実や事象が持つ本質的な意味合いまでも深く考察するに至っていることが確認できる。

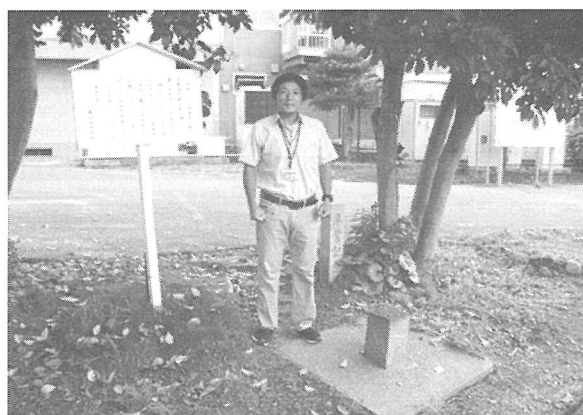


📖 考察したことを学級全体で交流する様子。

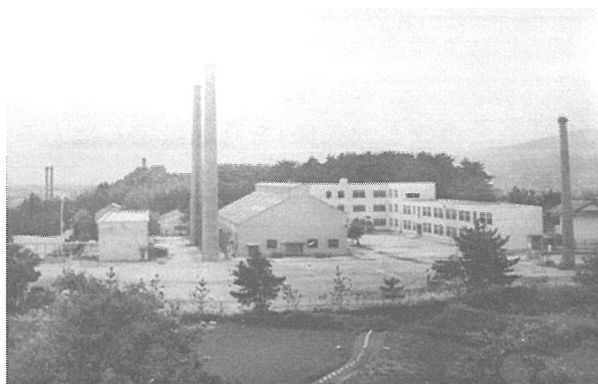


📖 全中社大阪大会の様子。

このような学習形態を粘り強く継続していくことができれば、「歴史を大観」し、歴史的事実・事象から現状や未来を考察する着眼点が「自然に」構築される（涵養される）。それこそがまさに「公民的資質を養う」ことと同じことを意味するものであると考える。



📖 「陸軍軍用地跡」の碑が残る附属池田中。



📖 砲兵工廠の煙突が残る。

📖 昭和42年当時の大教大附属池田中。



📖 四人グループで思考を深める様子。



📖 コの字型でヒト・コト・モノが会う。

(4) これからの「近現代」学習

「明治維新」「敗戦」に続く第三の大変革期にあると言われる今日の日本。少子高齢化、震災復興、原発問題（エネルギー政策）、東アジアにおける安全保障問題、中国からの汚染物質の飛来など、内外に様々な課題を抱える日本において、社会的ジレンマを含む具体的事例の宝庫とも言える「近代」の「明治維新」は、課題解決の手掛かりをつかむのに適した単元・教材である。

「近代」や「現代」は、それ以前の時代を扱う時と比べ、授業者の国家観や歴史観、政治的思想や信条などが無意識であっても直接的に表出しやすく、思考・判断・表現に特化した授業を展開しようと考えた時、歴史的事実を限りなく中立に、かつ客観的に偏見なく生徒に伝えることは難しい。何をどれだけどのような思いで、誰の立場に立って、誤解なく、かつ揺さぶりながら価値判断を迫る魅力あふれる授業が展開できるかは大きな課題だろう。歴史的分野を扱う授業者は幕末から明治維新にかけて特に興味・関心があるので、その授業者ならではの思い入れがあまり強くないように、また恣意的にならないように気をつけることが必要になってくるであろう。

平成 20 年告示の学習指導要領には、「時代の特色をつかみ、時代の特色や時代の転換について考えたり表現したりする学習を行う」とあり、これまでのようにできるだけ多くの歴史的事象を網羅的に学習することは、授業時間数が従前に比べ確保されたといっても、物理的に困難であるし、それを目指す必要もないと解釈できる。そこで、学習する内容の構造化と焦点化が必要不可欠となってくる。授業者は単元全体を見据えた単元計画を立案し、その中で知識・理解に重点を置く授業時間数や思考・判断に重点を置く授業時間数、そして思考したことやまとめたことを発表（プレゼンテーションやレジュメ）する授業時間数などを確保することが大切だ。その時に注意したいのは、知識・理解を中心とする授業であっても、「協同的な学び」の手法を取り入れながら^{※2}共有課題と発展課題を設定したいところだ。なお、大阪には近代遺産や所縁のある人物など、いわゆる「大阪もん」^{※3}的な資料や教材が豊富に存在する部分は学習者にとっても強みでもある。

※1 府中社研究発表基調提案 研究部長 李洪俊 大阪市立長吉中学校主席

※2 「一人ひとりを見つめ、ともに学ぶ社会科学習を求めて」全中社香川大会発表資料

井寄芳春 大阪市立咲くやこの花中学校教頭 飯島知明 府中社研究副部長

※3 「明治維新から何を学ぶか」全中社大阪大会の成果と課題 飯島知明

【実践事例 2】

(1) 題材

「明治維新」 ～ 欧米諸国の植民地支配と大日本帝国憲法 ～

(2) 目標

複雑な国際情勢の中で独立を保ちながら、日本の国際的地位の向上に尽力した政府や民衆の努力を知るとともに、その背景に近代的な政治制度の確立が必要であったことを理解する。

(3) 学習内容

連日のように海外の反政府デモや近隣諸国との領土問題が報道され、国内ではTPP加盟や日本国憲法改正などが議論され、今まさに国のあり方が問われている。この単元で扱う 19 世紀後半も、複雑な国際情勢の中で独立を保ち、欧米諸国と並ぶ近代国家として認められるために、産業

の発展や軍事力の増強だけでなく、近代的な政治制度の確立をめざして政府と民衆が対立しながらもそれぞれが理想とする国のあり方について考えた時代である。時代の転換期における「政府と民衆」「日本と海外」の関係を通して、生徒たちが主体的にこれからの日本や複雑な国際関係について考えるきっかけを与えることができる教材である。

「なぜドイツの憲法を参考にしたのか」という課題にグループで迫ることで、明治政府が目指していた国のあり方や政治制度、当時の日本国内の様子などを追究していった。さらに、大日本帝国憲法に基づき近代国家としてのさまざまな制度が整えられ、それが現代日本の政治や日本国憲法にもつながっていったことに気づかせたいと考えた。以下は実践の学習指導案である。

①評価規準表

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
明治維新による近代国家の形成と日本の国際的地位の向上などに関心を持って意欲的に追求している。	近代国家の形成過程を、当時の国際情勢と連動しながら多面的・多角的に考察し、そのことを適切に表現している。	近代国家の形成過程を史料や年表などの資料を活用し、読み取ったりまとめたりしている。	立憲制の国家が成立して議会政治が始まるとともに、日本の国際的地位が向上したことを理解している。

②本時の目標

- ・当時の国際情勢や国内の様子に留意しながら、仲間との対話を通して大日本帝国憲法の制定過程について多面的・多角的に考察し、その内容を適切に表現している。(思考・判断・表現)
- ・諸資料から課題に適した情報を選択し、読み取ったりまとめたり、効果的に活用したりしている。(技能)

③本時の展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 (コの字) (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から情報を読み取り、交流する。 明治天皇と黒田清隆の位置 内閣総理大臣伯爵＝黒田清隆 枢密院議長伯爵＝伊藤博文 外務大臣伯爵＝大隈重信 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・大日本帝国憲法「御名御璽と大臣の副署」や帝国憲法発布式などの資料から気づいたことを発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項をふまえながら資料の情報を読み取れているか。
展開 (4人班) (15分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">【課題1】欧米諸国の当時の状況をまとめよう！</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが調べた内容を発表し、ワークシートに欧米諸国の当時の状況をまとめていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に課題として、英・仏・独・米の当時の憲法（不文憲法）や政治制度などについて調べさせておく。(各班1人1カ国を担当) 	<ul style="list-style-type: none"> ・有用な情報を適切に選択し、まとめているか。

<p>(20分)</p> <p>まとめ (コの字) (5分)</p>	<p>【課題2】なぜドイツの憲法を参考にしたのだろうか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ドイツの憲法を参考にした政府の意図や当時の時代背景を考察する。 ・既習事項もふまえて考察する。 ・グループで考察した内容を発表し、思考を再構築する。 <p>・憲法の制定がのちの条約改正へとつながることに気づく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の国際情勢や日本国内の状況などもふまえさせる。 ・ドイツの憲法（プロイセン憲法）と比較させながら、日本がめざした国のあり方を追究させる。 ・自分の考えと比較させ、思考をさらに深めていかせる。 <p>・次回以降の授業とのつながりを意識させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・政府や民衆、日本や海外などさまざまな立場から考察しているか。 ・2つの憲法を思考に効果的に活用しているか。
--	---	---	---

(4) 成果と課題

「大日本帝国憲法がなぜドイツの憲法を参考に作成されたのか」という課題に取り組むとき、事前に19世紀の欧米諸国の状況（憲法・法律などの特徴、政治制度、国のようす）を班で分担して調べさせていたために、交流することでそれぞれの関連性や類似点、相違点などに気づくことができていた。また、それらを踏まえたうえで、「日本と海外」の視点でよく思考できていた。以下は、生徒の考えの一例である。

・ドイツは、発心してあり、アメリカに
 にならなかつたから。
 ・フランスは、市民の力が強く、
 おきているので危険と思ったから。
 ・アメリカは、法の下に、
 すべての人々が平等である
 ということと、せいぜいにとつて
 つこうかと思ひ。
 ・ドイツは、市民自治から、
 統一したことで、
 立憲君主制になった(天皇が)
 帝制)

日本は、植民地支配からのがれるために
 立憲君主制であるドイツを見習って
 天皇中心の世の中を目指した。
 又、日本とドイツは客観的に見ても
 同じ所に向かっている、
 天皇中心の世の中という点以外に
 営業の自由と国民平等
 等ほど色々共通点がある。

9月頃、注目を浴びた憲法改正、
 憲法が国に与える影響を、
 今回の調べ学習、及び交流を通じて
 知る事ができました。特に顕著な
 のがフランスであったと思われま
 す。憲法によって、民衆の自由が
 尊重されているが、
 度重なる革命によって
 国に大きな損害を与えました。
 憲法は、国を象徴し、
 左右する物なのだと、
 改めて実感しました。今一度、
 今の憲法が何のためにあるのか、
 何を支えているのかを
 考え直す必要があると思ひます。

大日本帝国憲法がドイツの憲法に
 影響を受けたのは、
 ドイツの憲法が皇帝(国王)
 中心であったからだと
 折かた。
 日本の政府がドイツの憲法を
 参考にし、イギリス・フランス・
 アメリカのものは参考にしな
 かったことや、これらの国内の
 様子から、政府は内乱や革命を
 恐れており、国民を操りやすい
 憲法を選んだのではないかと考
 へる。

単に「ドイツは君主の力が強かった。だから日本も君主（天皇）中心の国づくりのためにドイツの憲法を参考にした。」という知識理解で終わるのではなく、当時の日本の状況と欧米諸国の状況との比較によって、課題に対する自らの考えを導き出している。ただ、多面的・多角的な思考の視点が欧米諸国に偏り、当時の日本の政府と民衆の関係性からの見方や考え方はこちらからの支援や時間、資料が足りなかったため、たどり着けなかった。机間指導のなかで、教師が生徒の思考をいかにゆさぶっていくかも、生徒の深い思考力の育成へのカギとなる。

大日本帝国憲法 (教科書 P.184~P.185)

課題 1: 19 世紀の欧米諸国の状況をまとめよう!

国名	イギリス	フランス	ドイツ	アメリカ
憲法・法律などの特徴	大憲法で王に委ねられた正式な憲法はなかったが、議院制定法、判例法、憲法習俗の寄せ集めが成り立っている。実質的意味の憲法。	1789年、フランス革命→7年人権宣言が出された。近代立憲主義→個人の自由、権利を守るための憲法で権力者を拘束する。という考え方。	①プロイセン憲法、②フランクフルト憲法、③ビスマルク憲法、④北ドイツ連邦憲法、⑤南ドイツ連邦憲法、⑥ドイツ帝国憲法。3つが存在した。	アメリカ合衆国憲法。アメリカの憲法典(1787年に発行)した。世界最初の成文憲法。アメリカ法の基礎を築くもの。→前大憲法修正案の欠きこつた。→後大憲法修正案の欠きこつた。→1870年、日本に送られた。
政治制度	1877-1901 → ヴィクトリア女王、愛徳華期のイギリスの女王。上流階級→貴族の勢力が権威。中流階級→仕事、汗を流すもの。労働者階級→劣悪な生活条件のなかで生活することを苦に反抗した。	1789年、フランス革命の第一歩。最初は順調に展開した。ロンドン、スウェーデンを模倣。全ヨーロッパに波及。フランスに失敗→フランス第一共和政。1875年、第三共和政成立。	1871年、プロシヤがドイツ帝国を建国した。天皇主権をもった内容にして。→大日本帝国憲法の土台。憲法発布式の様子も日本にまねた。プロシヤ優位の連邦制。連邦各州が強い権限を持つ。	1787年、1789年、3つの大統領。民主政。1828年、白人男性、普通選挙権普及。1901年、女性にも選挙権。1971年、21歳以上→18歳以上に下げた。
国のようす	人口爆発→労働者人口が増えた。→経営者と労働者の対立も増えた。→ラディカル運動等(1810年代後半に死傷)。このラディカル運動は、発展し、選挙権拡大、普通選挙実施を求める運動も発展した。	この頃のフランスには、女権思想が根付いていた。→貧富の差はあっても、身分の上は平等。貴族、平民でなく雇用主と従業員の関係。(強制労働はなかった)。植民地支配をせざることを命じた。黒人も...	1807年、封建的制限が撤廃。→旧来の農地経営は、資本的な。ユーカー経営へと転換。農民の一部は、無産労働者へ転落。①プロシヤの大連邦制により、イギリスからの工業製品の輸入が、益絶た各地で綿紡績工場が生まれる。	南北戦争(1861~1865年)。北部→産業革命、奴隷解放。西部への領土拡大。南部→自由貿易、開拓。フランクリン農業。→1877年、南北戦争の終結。北部が勝利。

課題 2: なぜドイツの憲法を参考にしたのだろうか?

①自分の考え

- 天皇主権をおもな内容にしていて日本の理想とした形であったから。(天皇、君主を人格化している)
- 立憲君主制であった。(君主権が強い)
- 営業の自由→四民平等、同じ目的、目標を持っていた。

②メモ

- 共通点が多い。(第4条→四民平等、第86条→大連邦制)
- イギリス、フランス、アメリカでは... 市民の力が政治参加 強い(自由)。(法の下に平等)ではない。日本に回っていない。時評命記に記していない。(南北戦争)内乱がある。ドイツでは... 水戸黄門が大きな国にしたいという点を理想に。憲法を同じにすれば... という考えがあった。
- 日本のように、諸外国に少しずつあつたような形で... 植民地支配をせざることを命じた。黒人も...

③班での学び合いを続けて

イギリス、フランス、ドイツ、アメリカの当時の状況を調べて、当時の日本(伊藤博文)がドイツの憲法を参考にした理由を話し合。ア、予想することができて良かった。また、日本が明治時代の時のその国の権勢等も知ることが出来た良かった。今回調べたことを生かして、これからの歴史について興味を持ってほしいと思う。

↑生徒のワークシート

【実践事例 3】

(1) 題材

「ディベートをしよう!」 ~ 討論道場 ~

(2) 目標

現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

(3) 学習内容

テーマ「街中に防犯カメラの設置」「米軍基地の辺野古への移設」「若草山のモノレール敷設」

	防犯カメラ		米軍基地		モノレール	
	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対
A組	4班	6班	1班	5班	2班	3班
B組	1班	3班	2班	5班	4班	6班
C組	3班	2班	5班	4班	1班	6班
D組	3班	6班	1班	5班	4班	2班

(表 1)

クラスごとの対戦表と勝敗結果

(勝利班は ○)

クラスごとに3つのテーマを設定し、賛成・反対の6つの班（班は6～7人で構成）で分けた（表1）。各班はそれぞれ授業時間や放課後などを利用して、インターネットや書籍などを使い、情報収集や作戦を立て、ディベートにのぞんだ。

ディベート後、ディベートをした班以外の生徒に、「どちらの主張のほうにより説得力があったか」という基準で判定をさせた。前年度は、判定の際、自分自身が持っている意見ではなく、ディベートとしての「説得力」で判定するよう強調したが、やはり「説得力」というよりは生徒が持っている「価値観」などによる判定になりがちであった。そこで、今年度は判定基準を明確にするため、評価表を作成した。これにより判定を以前より客観的に行なうことができた生徒が増えたように感じる。しかし、まだ評価の項目にも曖昧な点も多く、改善が必要である。生徒は今回のディベートを通して、諸資料に基づく根拠の大切さや他者に物事を伝える言葉の選び方、テーマに対する多面的・多角的な視点からのアプローチを学び、他者の意見を通して新たな価値観を形成していくことができた。

↓ワークシートと感想

ディベートのテーマ「米軍基地を辺野古へ移設」

	賛成側 () 班	反対側 (5) 班
立論	5～7年以内に普天間基地を移設する。辺野古基地は海に隣接している。今より市民から遠い。地域の活性化。米軍兵士も辺野古区民同然の扱い。たくさん土地が返ってくる。	3460億円と9年というばかたなお金と時間がかかる。米女問題。米軍基地＝戦争の傷跡、である。ジュゴンやアオサンゴの生息。特定秘密保護法案
反論	お金をかけてでも、人命を助けるべき。ジュゴンも守ると、安倍首相も名言している。アメリカは日本にとって大切な存在である。	辺野古にも天然の動物がいる。ジュゴンを守る方法はたない。普天間での経済効果の方が人口も多いので大きいはず。市長は反対している。
まとめ	ジュゴンを見た人がいない。政府をたてないで誰をたてる？米とのパワーバランスが。首脳会談をできていない。アメリカが認めたのは辺野古	仲井真知事は民主党へ思返ししただけ。民意を無視したら、だめ！核が持ち込まれる可能性も。特定秘密保護法 マイケル・ムーアも

肯定側	5点満点で評価	否定側
5	①説得力がある。	5
4	②客観的に述べられている。	4
4	③メリットやデメリットなどに根拠がある。	3
5	④お互いに協力し、まとまっている。	5
18	合計点（時間オーバーで3点減点）	17

<感想>

世界レベルで賛否が分かれているこの問題をどちらのチームも地理、政治、経済など、様々な角度から責めこんでいて多面的に見られていました。言ったことに言い返して、また反論して、すごく接戦だったと思います。アメリカとの関係は難しいけど、やっぱり、沖縄の人の意見を尊重してあげることが大切だと思いました。

【実践事例 4】

(1) 題材

「領土問題を解決しよう！」～ 竹島について ～

(2) 目標

国際社会に対する理解を深め、国際社会における我が国の役割について考えるとともに、人類の一員としてよりよい社会を築いていくために解決しなければならないさまざまな課題について探究し、自分の考えをまとめ、表現することができる。

(3) 学習内容

平成 20 年「中学校学習指導要領」の改訂において、習得した知識や技能を活用して考えたことを説明したり、考えをまとめて論述したり、議論などを通して考えを深めさせたりすることがより一層重視された。本単元「よりよい社会をめざして」は、社会科のまとめとして位置付けられ、これまで学んできた地理・歴史・公民の学習の成果を生かして、世界を取り巻くさまざまな課題の解決に向けて、ディベートや議論、プレゼンテーションなどの手法で、社会的事象について考え続けていく態度を育てることができるものである。

さらに、平成 26 年「中学校学習指導要領解説」の一部改訂において、公民的分野では、北方領土や竹島に関し未解決の問題が残されていることや、現状に至る経緯、我が国が正当に主張している立場、我が国が平和的な手段による解決に向けて努力していることを理解させることが必要であると明記された。そこで、「竹島」をめぐる韓国との領土問題に焦点を当て、仲間との議論を通して深く思考させていくこととした。

社会科のまとめとして、地理的分野・歴史的分野との関連を図り、「対立と合意」「効率と公正」の視点、さらに世界的な視野と地域的な視点に立って探求させることを意識した。その際、さまざまな情報を比較・分析し、仲間との対話を通して思考を練り上げ、さらに仲間の発表を参考に自分の思考を再構築していくことも意識させた。以下は実践の学習指導案である。

①評価規準表

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人類の一員として、よりよい社会を築いていくために解決しなければならない課題について意欲的に探究し、自分の考えをまとめようとしている。	国際社会における課題の解決に向けて、我が国の役割について対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	国際社会における課題やその解決に向けての取り組みなどに関するさまざまな資料を収集し、有用な情報を適切に選択して読み取ったりまとめたりしている。	地球環境、資源・エネルギー、貧困など国際社会における課題の解決のために経済的、技術的な協力が大切であることを理解し、その知識を身につけている。

②本時の目標

- ・国際社会および我が国が世界の平和をどのようにして実現していくべきかということについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。(思考・判断・表現)

- ・資料から適切な情報を読み取り，思考を練り上げるときに活用することができる。(技能)

③本時の展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 (7分)	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の授業（パレスチナ問題）の復習 ・日本が抱える領土問題を挙げ，地図で場所を確認する。 北方領土問題（対ロシア） 竹島問題（対韓国） 尖閣諸島問題（対中国） ・竹島を領有するメリットを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決案を思い出させる。 ・掛け地図と Google Earth を併用する。 ・2月22日が「竹島の日」ということにも触れる。 ・地理での学習を思い出すよう促す。 	
展開 (4人班) (10分)	<p>【課題1】竹島の領土問題は何が原因でもめているのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料やこれまでの学習をもとに思考する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適時，思考の視点などを助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から適切な情報を読み取っている。(技能)
(30分)	<p>【課題2】竹島の領土問題を解決するには、どうすればよいだろう。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①自分の考えをまとめる。 ②班で討論をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えの課題を知る。 ・問題の複雑さを実感する。 ③班としての考えをまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・意見をまとめることの難解さを知る。 ④最終的な自分の考えをまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・予想される生徒の意見 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> 日本の領土だから譲れない。 韓国の領土である。 日本と韓国で半分ずつ。 日本と韓国の共有財産にする。 </div> 	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠を明確にさせる。 ・対立と合意，効率と公正の視点や日韓だけでなく，米や露，東南アジアなど各国からの視点も意識させる。 ・自分の考えと比較させ，思考をさらに深めていかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな視点から考察し，仲間との対話を通して，思考を練り上げている。(思考・判断・表現)
まとめ (3分)	<ul style="list-style-type: none"> ・国際社会での我が国の役割や自分自身の役割について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次回の学習へつなげる。 	

(4) 成果と課題

領土問題は、その背景に宗教や民族の対立、歴史的背景、資源などの利権、経済や政治などの周辺諸国との外交問題も絡んだ非常に難しい問題である。また、今回の竹島問題は日本と韓国の領土問題で、生徒にとっては当事国としてどうしても主観的な視点で問題を捉えてしまい、客観的に見ることが困難なテーマであった。そこで、本時の授業の前に、パレスチナ問題の解決について議論し、プレゼンテーションをさせることで、多面的・多角的な見方・考え方で事象を捉える視点を養った。結果、生徒は仲間との対話を通して、日本と韓国だけでなく第三者の立場からも事象を捉えようとしていた。さらに平和的な解決方法を模索しようと思いを深めることができていた。しかし、パレスチナ問題と竹島問題の類似点や相違点を踏まえたうえでの解決策には至らず、単純に「もめているから日本と韓国とで平等に分ける」といった案もみられた。今後は、それぞれの国が抱える状況も詳しく理解したうえでより多面的・多角的な見方・考え方で事象を捉えることができるよう指導していきたい。また客観的に事象を捉えるため、さまざまな視点から迫ることができる諸資料の収集も大切である。

↓ワークシート 「竹島問題を解決するにはどうすればいいだろう。」

国交を断絶してしまうという意見はあまりにも過激で絶対にやるべきではないと思う。

それに、日本では「日本のものだから韓国は間違っている」という見方がされているが、それは韓国でも同じであって、韓国にもしっかりと主張があるので、一概には決めつけられない。

だから双方の意見を尊重し、2国で竹島(独島)を所有することが可能であるならば、その方法が一番よいのではないかと思う。

アメリカが軍事拠点として利用する。

→理由、アメリカは韓国と北朝鮮の戦争において、韓国の味方をしており、アメリカは日本と日米安保条約を結んでいるので、アメリカが利用すれば、日本にも韓国にとっても有益だから。

→詳しく)面積的に訓練は無理でも食糧や燃料を保管し、アメリカ本土から来た飛行機に供給するなら可能。空港を造る資金は日米韓の3国が出す。ただし、竹島はアメリカ領でなく、竹島の領海および排他的経済水域は公海とする。

歴史的な面では日本も韓国も、自分のいいような見方をしているから、あまりあてにならないと思う。竹島は日本からも韓国からも距離が同じくらいで、もう国連の直轄地にしてしまえばいいと思ひました。それで、どちらの国のものか、客観的な視点をもつ国を交いえて、話し合うべきだと思ひます。

【実践事例 5】 授業者：吉田 昂平

(1) 題材

「世界各地の人々の生活と環境について解説しよう！」～言語活動の充実を目指して～

平成 20 年の中学校学習指導要領の改訂において、社会科では基本的な方針として「基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得」「言語活動の充実」「社会参画、伝統や文化、宗教に関する学習の充実」が掲げられた。本時で扱う単元はこの方針に従って新たに設けられた項目であり、人々が様々な条件のもとで多様な生活を営んでいることに気付かせ、異なる文化を尊重する態度を身に付けさせられるものである。具体的には、教科書を十分に活用することで「主題図の読み取り方」「気候区分や気温と降水量のグラフの読み取り方」「地域の風景や景観、人々の暮らしや衣食住などを写した写真の読み取り方」などの学習技能の育成を図ることができる。それゆえに、2 学期以降の「世界の諸地域」の学習へつなげ、広げていく上でも重要な意味を持つ単元である。

(2) 目標

世界の諸地域における人々の生活とその変化の様子を自然及び社会的条件と関連付けて大観させ、世界の人々の生活や環境の多様性に着目させる。

(3) 学習内容

本時は、これまでの 2 時間の授業との関連を図り、系統性を持った授業を目指した。これまでの授業では、事前に宿題として各自が調べたワークシートの内容を発表させ、各地でくらす人々の様子を多面的・多角的に捉えさせた。その後、解説するのに必要な知識を整理し、発表の仕方や内容についてグループで考えさせた。そして本時では「言語活動の充実」を中心に据えて世界の人々の生活や環境の多様性を理解させ、自分の班が調べた内容と他の班が発表した内容との共通点や相違点にも注目させた。発表においては「習得」「活用」「探求」の三つの指導を心がけた。第一に、メモを取りながら他の班の発表を聞かせることで、既存の知識の定着と新たな知識の習得を図った。第二に、調べる中で出てきた「なぜ」の疑問や教科書の写真、雨温図を解説させることで資料を活用する技能を育成した。第三に、生徒が発表を聞く中で気になった内容を伝えることで、自分たちの発表で足りなかった部分を見つめ直すことをきっかけとして、より深く知りたいという探求心を培った。以下は実践の学習指導案である。

①単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
世界各地の人々の生活の様子とその変化を意欲的に追及し、多様な生活の営みや異なる文化の存在を尊重する態度を身に付けている。	世界各地の人々の生活と環境が自然や衣食住、宗教と密接に関わっていることを、各地域の共通点や相違点から関連付け、その原因と結果を一般化された表現で表わしている。	教科書の雨温図と宗教分布図、各地域の生活を表わした写真から情報を正確に読み取るとともに、必要に応じて資料の作成やそれを活用した説明をしている。	世界各地における衣食住や宗教、自然環境の特徴を理解し、その多様性について具体的に説明できる知識を身に付けている。

②指導計画（全9時間）

第1次 世界各地の人々の生活と環境…4時間（本時はその3）

第2次 人々の生活に根ざす宗教 …1時間

第3次 伝統的な生活とその変化 …1時間

第4次 世界の気候区分 …3時間

③本時の目標

(i) 発表の内容を積極的に聞こうとする姿勢を持ち、世界の各地域の共通点や相違点を見付けだそうとしている。（社会的事象への関心・意欲・態度）

(ii) 教科書の雨温図と写真資料から読み取った内容を説明し、作成した資料を効果的に使用している。（資料活用の技能）

(iii) 発表から自然、衣食住などの特色を読み取り、ワークシートに記述している。（社会的事象についての知識・理解）

④本時の展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントの返却 ・発表の流れを再確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視聴覚教材を用いて時間をかけずに確認する。 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・発表前の最終打ち合わせをする。 ・ポスターセッション形式で発表を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ①各班4分間で発表をする。 <ul style="list-style-type: none"> →聞き手側はワークシートにメモを取る。 ②2分間で話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> 発表側 発表の仕方や伝え方について話し合う。 聞き手側 発表を聞いて気になったことを話し合い、記入する。 ③聞き手側は次の班の席に移動する。 ・①～③を自分の班以外の全ての発表を聞き終えるまで行う。（全七班） 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手がメモをとれるような早さで話すことや資料の提示の仕方についても配慮するよう指示する。 ・机間指導をおこない、発表の中で気になった点や良かった点を見つけておく。 ・発表時間の有効な使い方にも配慮させる。 ・反省点を活かしつつも発表ごとに極端な内容変更が出ないように注意を促す。 ・机間指導をしながら適宜アドバイスをする。 	<ul style="list-style-type: none"> (i) (ii) (iii) (i)

	・班員全員で「気になったこと」を確認し、回答できるものを考える。その場で答えられないものについては、調べる段取りをつける。	・次回の授業で、質問の回答を発表することを伝える。	
まとめ	・教師の話聞く。	宗教や文化的な側面からも世界各地の生活にせまれることを伝える。	

(4) 成果と課題

本単元を通して、「協同的な学びの有用性」「教師の役割の重要性」が感じられた。

「協同的な学びの有用性」については、各グループの発表の様子から、多面的・多角的な視点を得て、それを活かすことができていた。調べた内容をそのままにしておくのではなく、新たな視点や知識を得て共有を図り、さらにその視点や知識を活かす場面設定をおこなうことは、多面的・多角的な視点を身に付けさせることと同時に知識の定着にも効果的である。

「教師の役割の重要性」については、授業後の協議会において教師がタイムキーパーに徹していたとの指摘があり、そこから教師の役割はコーディネーターであることを改めて実感したものである。生徒の発表やその内容を「つなぎ、ひろげ、もどす」ことこそが真の学びへとつながるのであり、まさにコーディネーターとしての役割を意識しておくことの重要性を感じた。

【実践事例6】 授業者：吉田 昂平

(1) 題材

「南アメリカの環境を考えよう！」～知識の構造化～

(2) 目標

南アメリカ州の地域的特色をとらえ、蓄積された知識を構造化し、そこから課題について考察することで世界の様々な地域または国の調査を行う際の視点や方法を身に付けさせる。

(3) 学習内容

本校社会科の「知」である多面的・多角的な見方・考え方の獲得のためには、共有課題や発展課題における「なぜ」の疑問に対する説明的知識が前提となる。そのためにはまず、分析的知識によって学習内容を整理する必要があるが、この分析の能力においては発達段階によって差が顕著に出る。特に、中学1年生の段階では「なぜ」の疑問を説明するための記述的知識を身に付けることが重要である。このことから、分析、記述、説明の手順で授業を構成した。具体的には、「南アメリカの開発の進行にともなう影響にはどのようなものがあるか」という課題を図式化して表し、その後の課題を考えていく上で必要となる内容の整理をした。(分析)さらに、その知識を活かして課題に取り組みせ、(記述)諸資料や仲間との対話を通して自らの思考や判断を再構築し、多面的・多角的に考察していくことを目指した。(説明)指導にあたっては協同的な学びの手法を取り入れ、グループで考えることで多様な意見を取り入れることが出来るようにした。なお、本単元の授業は1時間ごとに目標を「習得」「活用」「探求」とし、全3時間として進めた。

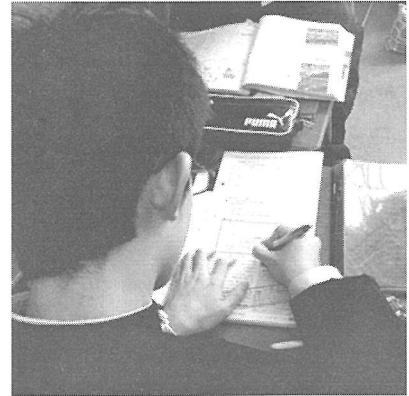
①「南アメリカをながめる」：習得の段階

南アメリカ州の学習課題「開発の進展と環境問題」を提示し、地形・産業・歴史・文化の側面から南アメリカ州についてとらえさせ、全体像をつかんだ。(図Ⅰ，Ⅱ)なお、指導に当たってはICT機器で写真やグラフを見せ、南アメリカ州の自然や農業について実感をわかせることや資料を深く読み取らせることに留意した。

図Ⅰ「南アメリカ州の課題提示」



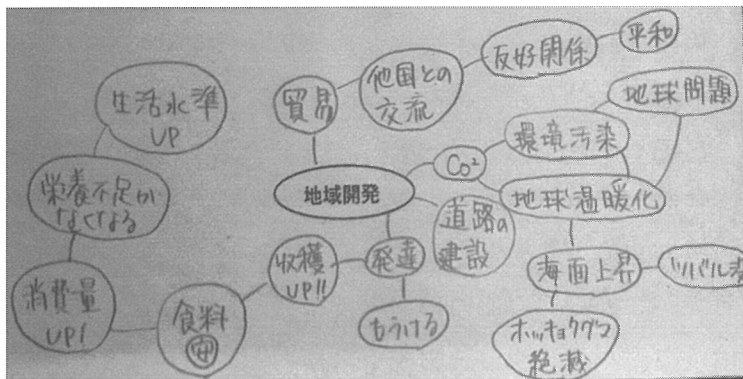
図Ⅱ「ワークシートで作業をする様子」



②「自然環境と共生する人々」「開発の進行とその影響①」：活用の段階

「南アメリカ州のそれぞれの地域（アマゾン川流域，森林，草原）でくらす人々がその土地の環境とどのように関わってきたか」をまとめ、グループで発表したのちに全体で共有した。その後、「地域開発を行うことによる影響」について図式化することにより、知識の構造化を図った。具体的には、影響について個人でワークシートに記入後、(図Ⅲ)3面に割いた黒板を用いてリレー形式で連想されることを書かせ、(図Ⅳ)生徒の意見を集約し黒板に書き込まれた内容をカテゴリー化した。その内容を参考に、生徒にも色鉛筆で色分けさせ、ワークシートの内容をカテゴリー化させた。その際、1つのものが2色以上となる可能性もあることに留意させた。(図Ⅴ)

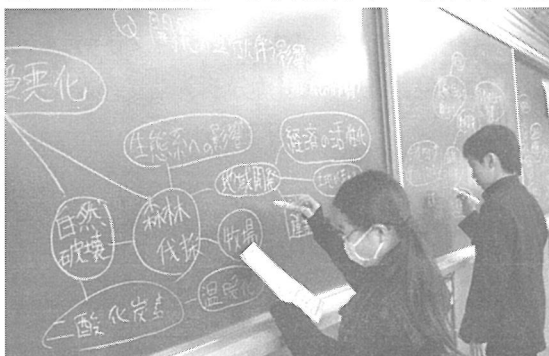
図Ⅲ「生徒の図式化したワークシート」



図Ⅴ「関連図の例」

おもな生徒の意見	カテゴリー化したもの
インフラ	土地
牧場建設	
道路建設	
森林伐採	地球温暖化
異常気象	
海面上昇	
大規模な栽培	農業
大量生産	
スラムの拡大	経済
失業者の増加	
国力の低下	

図Ⅳ「地域開発から関連付けて板書する」



③「開発の進行とその影響②」：探求の段階

前時の授業を受けて「これからの開発のあり方」について考えさせた。図式化によってとらえた問題点をもとに南アメリカ州のこれからの探求していくことで、生徒の「世界を見る目」を養い、世界を現在進行形でとらえることができるようにした。具体的には、個人で考えた意見（図VI）を四人グループにおいて口頭で発表させ、（図VII）それぞれが板書したキーワードをもとに全体で発表をおこない、深まった意見の共有を図った。（図VIII）最後に、「南アメリカでは開発が進んだことにより、環境にどのような変化が起こったのでしょうか」というまとめをおこない、本単元を締め括った。

図VI「おもな生徒の意見」

- ・少ない土地で多くのものをつくれるように品種改良や効率的な農業をおこなう。
- ・自然はいずれなくなるため、植林をおこないつつ、地域開発への補助金をなくす。
- ・自然と共生していた昔ながらの生活に戻す。
- ・ブラジルの国旗のように、秩序と進歩を目標に掲げて開発のあり方を考え直す。

図VII「グループで思考を深める」



図VIII「コの字での発表」

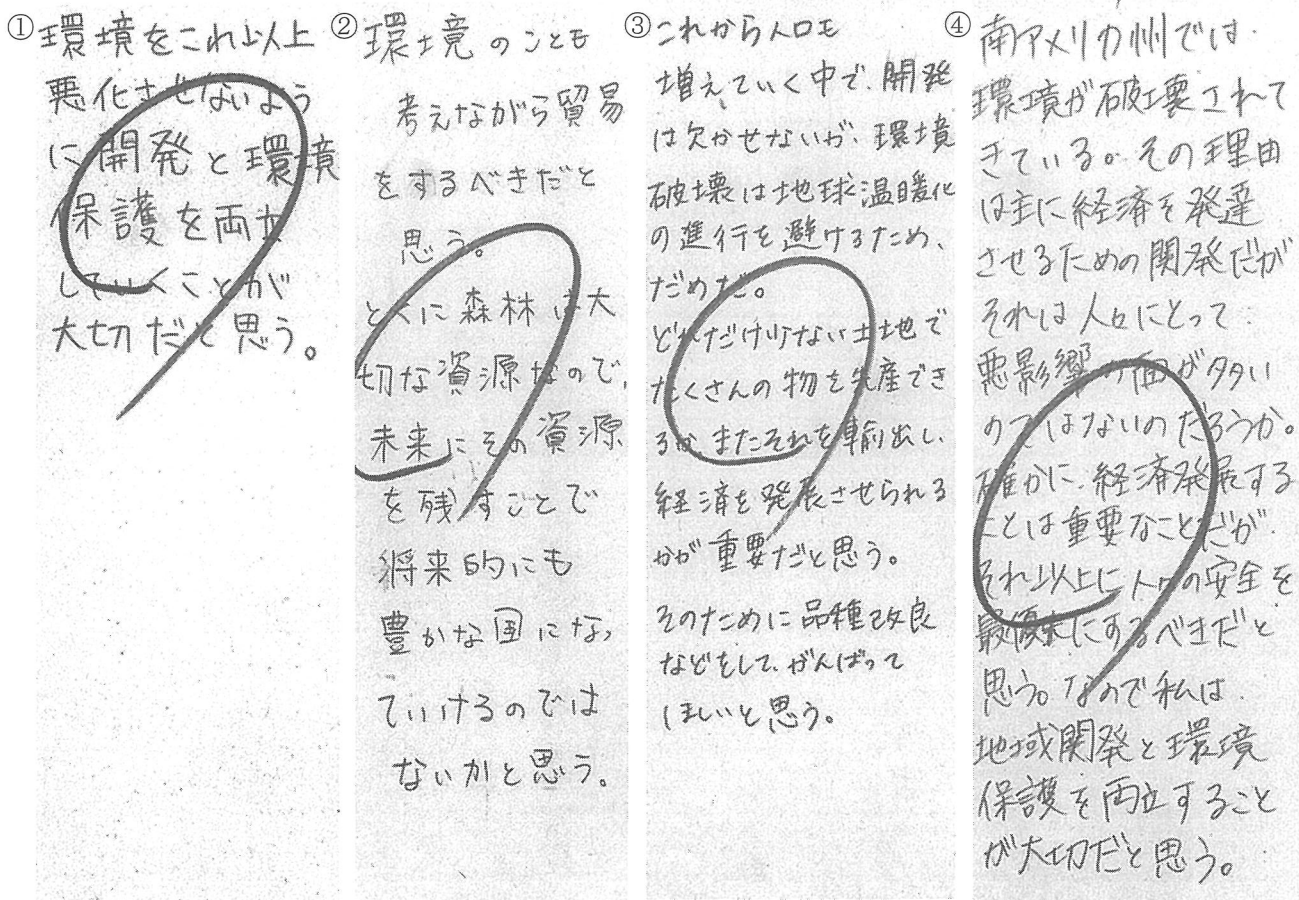


（4）成果と課題

成果としては、「図式化の意味付け」があげられ、思いついたことを関連づけていく方法によって次の課題に対する意識の持ち方や思考のあり方に影響をもたらすことが明らかとなった。実際、「良い影響」「悪い影響」「良い影響と悪い影響」と、中心に取り上げた内容を学級によって変えたところ、その後の開発のあり方を考える際に変化が見られた。「良い影響」を中心に取り上げた学級では、それぞれの長所をのばしていくような考え方をする生徒が多くみられ、「悪い影響」を中心に取り上げた学級では、課題を解決していくような考え方をする生徒が多く見られた。さらに、双方を中心に取り上げた学級では良い影響を伸ばしつつ、課題解決に向けた取り組みを考える生徒がみられたことから、図式化は課題を考えていく上で重要な意味づけを持つことが判明した。そのため、図式化の段階でいかに多面的・多角的な視点から捉えさせるかが思考を深めるためのカギとなる。

また、協同的な学びの手法は「つながり、かさなり、ひろがる授業」を目指す上で効果的であることが示された。知識の構造化により課題を考える視点を得て、それを活かすことのできる協同的な学びは、まさに「知」の育成へとつながっているといえる。今回の実践から、協同的な学びを活かすための手法の1つとして、知識の構造化をあげることが出来るのではないだろうか。

図IX 「試験の解答」



課題としては「記述的知識の育成」があげられる。授業で取り上げた同じ内容の課題を思考・判断・表現を問う問題として出題したところ、授業時には口頭で論拠立てて説明できていた生徒の解答が試験では簡潔に表現されていることに気付いた。(図IXの①) 一方、授業で発表する機会がなかった生徒や口頭で説明することを不得意とする生徒には、具体性を持った解答や考えた理由を明確にした解答が見られた。(図IXの②, ③, ④) また、いずれの解答にしても根拠が明らかなものではなかった。このことから、口頭での表現力と記述での表現力との差をできるだけなくし、根拠を明らかにして説明する力を身に付けさせる必要を感じた。そのためには、双方の表現力の基となる記述的知識の育成が不可欠である。思考する段階から根拠を明らかにするための資料を充実させ、自分の考えを論理立てて記述する機会を増やし、それを発表する場を多く設けるようにしたい。

3. 成果と課題

成果として、新聞を活用し、「協同的な学び」の手法を取り入れることで、生徒が社会に興味・関心を持ち、自ら積極的に情報へ迫る姿勢がこれまで以上に認められた。また他者の意見や考え方に触れることで自分の考えを再構築し、新たな価値観を形成していく姿が伺えた。

今後は、中学校における3年間の「つながり、かさなり、ひろがる授業」だけでなく、小中高の12年間を見通した「つながり、かさなり、ひろがる授業」をより一層深めていかなければならない。社会科にとって資料に根拠を求め、議論を深めることは大切である。次年度は、同じ資料を小中高でいかに扱っていくかなど、より具体的な指導法の研究を進めたい。